
図書少女の暗躍日記

宮川あゆむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書少女の暗躍日記

【Nコード】

N7151X

【作者名】

宮川あゆむ

【あらすじ】

人の知らない裏の世界で図書室にこもる少女が暗躍する。

プロローグ

夏休み後半、秋原美菜あきはらみいなはそこそこ充実した生活を送っていた。

しかし、彼女は少々不機嫌である。

宮坂夢華みやざかゆめかに突然図書館に来てと呼び出されたからだ。

昼頃、自転車で二十分ほどにある町内の図書館に向かった。

駐輪場に自転車を止めて中に入る。

外とは違う静寂な空気を感じながら入り口近くの階段を上り、きれいに分別された本がぎっしりと置いてある書棚の間を見ながら夢華を捜した。

途中、大学生らしき男が通り過ぎる際に奇妙な物を見るような目つきで秋原の顔を見ていた。

秋原はそれを横目に夢華を捜していると、正面に長い髪の少女が椅子に座っていて膝には手提げカバンを置いていた。

秋原は彼女に近づく。

それに気が付いた少女が秋原を見て静かに笑みを浮かべた。

「ちょっと、夢華。急に呼び出してなに？」

秋原は怪訝な顔をした。

「課題をやってもらおうと思って」

夢華は言った。彼女の印象はいつもの制服姿とは違って大人っぽさがあった。

「課題？」

「まあ、ここで話すよりあっちに行ってから話しましょ」

そう言って夢華が見る視線の先にはそれぞれ壁で区切られた机があった。

主に一人で集中して勉強したりする場所だが今日は誰も人がいなかった。

秋原は一番端の机に座った。

「で、課題ってなに？」

隣の椅子に座った夢華に再び訊くと彼女は持っていた手提げカバンの中からなにやら取り出した。

「これよ」

夢華が机に置いたのは分厚い大学ノートぐらいの大きさの本だった。

「なに？これ？」

その本は赤い革できた表紙で最初のページを開くと左に『幻夢記録』と書かれていた。しかし、後のページを開いてもそこには何も書かれていなかった。

「何も書いてないけど」

そういつて秋原は何回もページをめくる。

「今から書くのよ。今まで起きた出来事をね」

そういつてまた手提げカバンから筆箱を取り出し、机に置いた。

「私が!？」

秋原は夢華をみて人差し指を自分の顔に指した。

「そう。あなたが書かなきゃあの呪いは解けないわ」

「はあ」秋原は察したのか、ため息をついた。「わかった。でも、どういつ風に書けばいいの?」

「さつきもいつた通り、今までの起きたこと、私たちがしてきたことを書くのよ」

「日記……みたいな感じかな?」

夢華は頷いた。「ええ、そんな感じでいいわ。あと、出来るだけ細かく書いて。そうしないと意味がないの」

秋原は本の最初のページを開いて、夢華の筆箱からシャープペン

シルを取り出した。

「そんなに詳しく覚えてるかな？」

「わからないところがあれば私が教えるわ。でも頼りすぎるのはダメ。極力自分で書くことね」

それを聞いて秋原はどこから書いていいものか考えた。

紙にシャープペンシルの芯を二回軽く叩く。

そして何か思いついた顔を見ると、さっそくシャープペンシルを走らせた。

プロローグ（後書き）

- ・ 投稿はしてみたものの、まだまだストーリーが固まってないですね・
なんとか続きが書けるようにがんばります

夏：幻夢記録 一（1）

私の全身の皮膚は焼けただれていた。

白いブラウスから露出した腕、首から顔全体にかけて赤くボロボロになっている。

それは鏡に映った私の姿だ。

実際はなんの傷もなく、いたって健康的な肌である。

それを知ったのは高校一年生の時だ。

二学期の始めからなぜかクラスメートが急に私を避けるようになった。

何か気味の悪いものを見ている顔をしていて、クラスメートだけじゃなく、他のすれ違う生徒も私を見て表情を変えていた。

私が教室に入って自分の席に座ると、窓際の席を囲んでいる女子生徒達の視線に気づいて顔をそちらに向ける。

目が合うと彼女達は慌てて目をそらして雑談をし始めた。

なにが起こっているのかわからず、この日、誰ともしゃべらずに一日が過ぎていこうとしていた。

放課後、一人でトイレに入っただけにある鏡を見た時私は体を凍らせた。

鏡が映しだした私の姿はまるで別の生き物がこちらを見ているようだった。

気味が悪かった。

慌ててトイレから出ると、廊下で雑談をしていた二人の男子生徒がこちらを見ると、私から遠ざかるように歩いて行った。

廊下の反対側の女子生徒も私と目が合うと教室の方へと逃げるように入っていく。

この時に気づいた。みんなに見えているのは化け物と化した私の姿だと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7151x/>

図書少女の暗躍日記

2011年11月16日22時28分発行